

五島列島・下崎山町方言の動詞における後舌母音の 交替

有元, 光彦

<https://doi.org/10.15017/2332568>

出版情報 : 文学研究. 89, pp. 1-32, 1992-03-25. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :



五島列島・下崎山町方言の動詞に おける後舌母音の交替

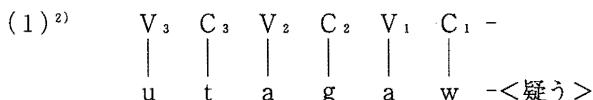
有 元 光 彦

1. はじめに

本稿は、五島列島・下崎山町で話されている方言の子音語幹動詞を対象とし、その語幹末子音の直前の母音がいかに交替するかについて、データの列挙とその分析を目的とする¹⁾。

まず注意すべきことは、本稿で示す母音交替現象は、意味の弁別とは無関係であるということである。例えば、/am-/〈編む〉の完了形では [ada] ~ [oda] 〈編んだ〉の両方が現れるが、これら二つの間に意味の違いはない。従って、ここでは、[ada] と [oda] という二つの自由変異 (free variation) が存在し、二つの間に「ゆれ」がある、ということである。この「ゆれ」を音韻的に見れば、[ada] ~ [oda] は母音 [a] と [o] のゆれであると言える。本稿では、このような母音のゆれを「母音交替」として捉え、これを規則化しようとするものである。その際、「自由変異というのは、語幹の形態素が二つ（またはそれ以上）共存する状態ではなく、ゆれのある（母音交替を起こす）母音のある素性が無指定であるような語幹を一つ持っている状態である」という仮説に基づいて、論を進める。

最初に、論旨を明確にするために、動詞語幹の部分に便宜上次のような図式を設定しておく。



subscript の付け方などは、有元 (1991 : 79) と同じである。また、データの部分では、動詞の活用形の例を次のように挙げて行く³⁾。

(2)	語幹基底形	終止形	否定形	完了形
	/kaw-/ <買う>	ka?	kawan	*kata (A系列形)
		*ko?	*kowan	kota (O系列形)
		*ku?	*kuwan	*kuta (U系列形)

(2) から分かるように、まず一番左に語幹基底形を挙げる。<>には、その大体の意味を記す。活用形は、終止形・否定形・完了形の3つを左から順に挙げる。そして、V₁ の位置にある母音が [a] で現れる形を「A系列形」、[o] で現れる形を「O系列形」、[u] で現れる形を「U系列形」とそれぞれ呼ぶことにする。従って、例えば (2) では、「O系列形の完了形」は [kota] <買った> を指すことになる。

以下のデータ及び分析では、C₁ = /w, b, m/ である動詞をそれぞれ「w, b, m 語幹動詞」と呼ぶ。これらの動詞には、全て後舌母音の交替が関わるので、これらを一括して扱うことにする。また、V₁ の位置には /a, i, u, e, o/ という全ての母音が来ると論理的には考えられるが、実際は V₁ が /i, e/ である動詞は存在しない。

2. データ及び考察

まず、V₁ = /a/ である動詞の母音交替を見てみる。これらの動詞は、母音交替を起こすか起こさないか、起こすとすればどの活用形で起こすのかなどの違いによって、表面的には次の8つのグループに分けられる。

- (3) a. Aグループ：A系列形は、完了形のみ不適格。O系列形は、完了形のみ適格。U系列形は、どの活用形でも不適格。
- b. Bグループ：A系列形は、完了形のみ不適格。O系列形は、完了

形のみ適格。U系列形も、完了形のみ適格。

- c. Cグループ：A系列形は、完了形のみ不適格。O系列形は、どの活用形でも適格。U系列形は、どの活用形でも不適格。
- d. Dグループ：A系列形は、全て適格。O系列形も、全て適格。U系列形は、全て不適格。
- e. Eグループ：A系列形・O系列形・U系列形とも、どの活用形でも適格。
- f. Fグループ：A系列形は、全て適格。O系列形は、完了形のみ適格。U系列形は、全て不適格。
- g. Gグループ：A系列形は、全て適格。O系列形は、否定形のみ不適格。U系列形は、全て不適格。
- h. Hグループ：A系列形は、全て適格。O系列形は、適格性にゆれが生じている。U系列形は、全て適格。

以下の各節では、それぞれのグループのデータを順に挙げて考察して行くことにする。

2.1. Aグループ

まず、Aグループに属する動詞を（4）に挙げる。

(4) a. /kaw-/＜買う＞	ka?	kawan	*kata
	*ko?	*kowan	kota
	*ku?	*kuwan	*kuta
/aw-/＜会う＞	a?	awan	*ata
	*o?	*owan	ota
	*u?	*uwan	*uta
/utagaw-/＜疑う＞	utaga?	utagawan	*utagata

	*utago?	*utagowan	utagota
	*utagu?	*utaguwan	*utaguta
/tigaw-/＜違う＞	tfiga?	tfigawan	*tfigata
	*tfigo?	*tfigowan	tfigota
	*tfigu?	*tfiguwan	*tfiguta
/utaw-/＜歌う＞	uta?	utawan	*utata
	*uto?	*utowan	utota
	*utsu?	*utsuwan	*utsuta
/naw-/＜縋う＞	na?	nawan	*nata
	*no?	*nowan	nota
	*nu?	*nuwan	*nuta
/haw-/＜這う＞	ha?	hawan	*hata
	*ho?	*howan	hota
	*Φu?	*Φuwan	*Φuta
/tukaw-/＜使う＞	tsuka?	tsukawan	*tsukata
	*tsuko?	*tsukowan	tsukota
	*tsuku?	*tsukuwan	*tsukuta
/kabaw-/＜庇う＞	kaba?	kabawan	*kabata
	*kabo?	*kabowan	kabota
	*kabu?	*kabuwan	*kabuta
/sumaw-/＜住まう＞	suma?	sumawan	*sumata
	*sumo?	*sumowan	sumota
	*sumu?	*sumuwan	*sumuta
/yuwaw-/＜祝う＞	juwa?	juwawan	*juwata
	*juo?	*juowan	juota
	*ju:?	*ju:wan	*ju:ta
b. /kam-/＜囓む＞	kan	kaman	*kada

*kon	*koman	koda
*kun	*kuman	*kuda

前述したが、これらの動詞の場合、 V_1 が [a] として現れる活用形（A系列形）では完了形のみが不適格であり、終止形及び否定形は適格である（例えば /kaw-/ <買う> であれば、* [kata] <買った> は不適格であるが、[kaʔ] <買う> 及び [kawan] <買わない> は適格である）。 V_1 が [o] として現れる活用形（O系列形）では、完了形のみが適格であり、終止形及び否定形は不適格である（/kaw-/ <買う> であれば、[kota] <買った> は適格であるが、* [koʔ] <買う> 及び * [kowan] <買わない> は不適格である）。そして、 V_1 が [u] として現れる活用形（U系列形）では、終止形・否定形・完了形のどの活用形でも不適格である（/kaw-/ <買う> であれば、* [kuʔ] <買う>、* [kuwan] <買わない>、* [kuta] <買った> は全て不適格である）。

U系列形は全て不適格であるので、対象から外すとして、問題はO系列形の完了形である。O系列形では完了形のみが適格である。語幹の基底形で V_1 の位置にある母音は /a/ で間違いなさであろうから（例えば <買う> であれば、語幹の基底形は /kow-/ ではなく /kaw-/ である）、O系列形で完了形のみが適格であるというのは、「音便」と関係があるということを示唆している。従って、有元（1990：左33）と同様、次のような規則を仮定してみる。

（5）a/o 交替規則⁴⁾

語幹末分節音が両唇音である動詞語幹に、/t/ で始まる接辞が続くとき、語幹末分節音の直前の母音 /a/ は /o/ と交替する。

$$a \rightarrow o / \text{ } \overset{C}{\text{ }} [+lab] - t$$

有元（1990）では、規則（5）は <買って来た> などの「テ形」における母音

交替を記述するために仮定したものであった。勿論、完了形にも適用できるものであるから、現時点では(5)の形のまま設定しておくことにする。そこで、例えば /kaw-/〈買う〉であれば、次のような派生を辿ることになる。

(6) /kaw-ta/ → (5) → kow-ta → (OR)⁵⁾ → [kota]〈買った〉

一方、O系列形の完了形の適格性を記述するのに、「母音と /w/ との融合」という音声的にも一般的な規則を設定することも考えられる。

(7) aw (→ o:) → o / ___ -

ここで先走りをして、この規則を更に一般的にすると、次のようになる。

(8) $\begin{matrix} C \\ a \end{matrix}$ [+lab] → o / ___ -

こうすることによって、例えば [oroda]〈叫んだ〉や [oda]〈編んだ〉などのO系列形の完了形も説明することができる。即ち、

(9) a. /orab-ta/ → (有声性同化)⁶⁾ → orab-da → (8) → [oroda]
 〈叫んだ〉

b. /am-ta/ → (有声性同化) → am-da → (8) → [oda]〈編んだ〉

のように、適格な形を派生できる。しかし、O系列形の否定形が適格である動詞に関しては、まずいことが起こる。/orab-/〈叫ぶ〉のO系列形の否定形の例を出そう。

(10) /orab-an/ → (8) → oro-an → * [oroan]〈叫ばない〉
 (適格な形は [oroban])

このように、(8)が適用されると、語幹末子音がその直前の /a/ と融合し

て消え、結果的に不適格な形が派生されてしまうのである。（５）にしろ（８）にしろ、いずれも w, b, m 語幹動詞の V₁ の母音交替現象を一つの規則によって記述することを目指したものであるが、（８）のような融合規則ではうまく行かないのである。そうかと言って、（９）のような完了形の場合には融合規則（８）が適用され、（１０）のような否定形の場合は a→o の母音交替規則が適用されるとしたのでは、複雑になり過ぎ、何より同じ現象に対して同じ効果を出すような規則を二つ設定することになる。勿論、（５）であっても、そのままでは [oroban] <叫ばない> などの形を説明することはできない。（５）は完了形の場合にしか適用できないからである。しかし、ここでは（５）をどう改訂するかについては述べず、詳細は 2.3 で示す。

2.2. B グループ

次に、B グループの例を見る。

(11) /waraw-/ <笑う>	wara?	warawan	*warata
	*waro?	*warowan	warota
	*waru?	*waruwan	waruta
/araw-/ <洗う>	ara?	arawan	*arata
	*aro?	*arowan	arota
	*aru?	*aruwan	aruta
/karaw-/ <背負う>	kara?	karawan	*karata
	*karo?	*karowan	karota
	<karu?>	<karuwan>	karuta

3 例しかないが、これらの例は、A 系列形では完了形のみ不適格で、O 系列形及び U 系列形では完了形のみ適格である。A 系列形及び O 系列形の適格性は A グループの動詞の場合と同じであるので、[warota] <笑った> などの O 系列形の完了形を導くためには規則（５）が適用されていると考えて良いが、問題

はU系列形の完了形である。ここで注目すべきことは、(11) に挙げた3つの動詞に共通するものがあるということである。即ち、どの動詞の語幹も $V_1 = V_2 = /a/$, $C_2 = /r/$ である。従って、このことがBグループをAグループから（そして、以下に述べるCグループからも）分けている決定的なことであると考えられる。そこで、U系列形の完了形を導くために、次のような義務的 (obligatory) に適用される規則を仮定する。

(12) a/u 交替規則 (義務規則)

$$a \rightarrow u / a \ r \ \underline{\quad} \ w - t$$

この規則を使うと、例えば /waraw-/ <笑う> であれば、次のような派生過程を辿ることになる。

$$(13) /waraw-ta/ \rightarrow (12) \rightarrow waruw-ta \rightarrow (OR) \rightarrow [waruta] \text{ <笑った>}$$

2.3. Cグループ

次に、Cグループに属する動詞を見てみる。

(14) /yataw-/ <雇う>	jata?	jatawan	*jatata
	jato?	jatowan	jatota
	*jatsu?	*jatsuwan	*jatsuta
/hiraw-/ <拾う>	çira?	çirawan	*çirata
	çiro?	çirowan	çirota
	*çiru?	*çiruwan	*çiruta
/soraw-/ <整う>	sora?	sorawan	*sorata
	soro?	sorowan	sorota
	*soru?	*soruwan	*soruta
/ikaw-/ <寛ぐ>	ika?	ikawan	*ikata

ikoʔ	ikowan	ikota
*ikuʔ	*ikuwan	*ikuta

これらの例がA・Bグループと違うところは、まずO系列形である。CグループのO系列形では、完了形のみならず、終止形や否定形も適格になっている。有元（1991：81, 88）では、この事実を記述するために、規則（5）を次のように改訂している。

(15) a. a/o 交替規則

語幹末分節音が両唇音である動詞において、語幹末分節音の直前の母音 /a/ は /o/ と交替する。

b. a/o 交替規則の適用方式

w 語幹動詞の終止・連体形及び否定形では適用されないが、完了形では義務的に適用される。b, m 語幹動詞では、活用の違いに関係なく、随意的に適用される。

(15 a) を仮定すると、もはや「a/o 交替現象は「音便」とは関係がない」ということになる⁷⁾。しかし、今まで見てきたように、(15 b) は改訂しなくてはならない（(16) では (15 b) の b, m 語幹動詞に関する記述は省略）。

(16) a/o 交替規則の適用方式（改訂版）

A・Bグループの終止形・否定形では適用されないが、完了形では義務的に適用される。Cグループの終止形・否定形では随意的に適用され、完了形では義務的に適用される。

ここで問題になることがある。(15 a) のように改訂すると、いずれにせよ(16) のように、どのように適用されるか（義務的か随意的か）を活用形ごとに規定しなければならなくなる。そもそも活用形の違いは動詞語幹の後に続く接辞の違いであるので、(16) のように活用形ごとに規則の適用の仕方を規定

しては、(15 a) が ad hoc な規則になる。

そこで、まず語幹の基底形の問題を考えてみる。今まで挙げたデータの語幹基底形では、暗黙のうちに、 $V_1 = /a/$ であると仮定し、これに基づいて (12) や (15 a) の母音交替規則を設定してきた。しかし、 V_1 の基底表示 (underlying representation) が動詞ごとに違うとしたら、どうなるであろうか。例えば、Aグループ及びBグループのA系列形・O系列形の適格性は、「A系列形は、完了形のみ不適格。O系列形は、完了形のみ適格」((3 a, b) 参照) というように両方とも同じである。このことから、Aグループ及びBグループに属する動詞の V_1 の基底表示は、 $/o/$ ではなく $/a/$ であることには間違いなまいだろう。一方、Cグループでは、 a/o 交替現象は全ての活用形に起こっているので、 V_1 の基底表示は $/a/$ でも $/o/$ でもどちらでも良いことになる。即ち、Cグループの動詞の語幹は、 $/Xaw-/ \sim /Xow-/$ という二つの自由変異を持っていることになる。これは、語幹に二つの形態素を設定していることに他ならない。しかし、簡潔さの点では、語幹形態素は一つであるに越したことはない。そこで、 $/Xaw-/ \sim /Xow-/$ のゆれは音韻的には $/a/$ と $/o/$ のゆれであることから、このゆれを (17) のように素性 [low] の指定の違いに還元して、語幹基底形を一つにしてみる⁸⁾。

$$(17) \text{ a. A・Bグループ: } / X \begin{bmatrix} V \\ +\text{back} \\ -\text{high} \\ +\text{low} \end{bmatrix} w - /$$

$$\text{ b. Cグループ: } / X \begin{bmatrix} V \\ +\text{back} \\ -\text{high} \\ 0 \text{ low} \end{bmatrix} w - /$$

このように、A・BグループとCグループとの違いは、 V_1 の素性 [low] にプラス (+) が指定されているか、それとも無指定 (unspecify) であるかの違いである。ここでは、自由変異を、 V_1 のある素性の値が無指定であると捉

えている。より厳密に言えば、「自由変異というのは、/Xaw-/~/Xow-/ という二つの語幹が共存する状態ではなく、ゆれのある母音 V₁ のある素性が無指定であるような語幹の一つ持っている状態である」という仮説に基づいていることになる。

そこで次に、a/o 交替規則というものを考え直してみる。V₁ の位置において a→o の交替が起こるということは、A・B グループの完了形では [+low] を [-low] に義務的に変えることである。C グループでは、完了形の場合と終止形・否定形の場合とに分けられ、前者の場合は無指定の [low] にマイナス（-）の値を義務的に入れる規則であり、後者の場合はマイナス（-）またはプラス（+）の値を入れる規則が必要となる。しかし、後者の場合では、既に基底表示の段階で (17b) のようにしているので、これ以上 a/o 交替規則を適用する必要はなく、辞書部門 (lexicon) を出るまで (17b) の表示のままで良い。(17b) の [low] の値は、辞書部門を出る時点で、自動的にプラスかマイナスかの値が付与される。従って、A・B・C グループの完了形にのみ適用されるような a/o 交替規則を設定すれば良いことになる。これは次のようになる。

(18) a/o 交替規則 (義務規則)

$$\begin{bmatrix} \text{V} \\ +\text{back} \\ -\text{high} \end{bmatrix} \rightarrow [-\text{low}] / __ \text{w-t}$$

各グループの適用例は、次の通りである。

(19) a.
$$\begin{array}{c} \text{V} \\ +\text{back} \\ -\text{high} \\ +\text{low} \end{array} \text{ w-ta/} \rightarrow (18) \rightarrow \begin{array}{c} \text{V} \\ +\text{back} \\ -\text{high} \\ -\text{low} \end{array} \text{ w-ta} \rightarrow (\text{OR})$$

$$\rightarrow [\text{kota}] < \text{買った} >$$

- b. $\text{/war } \begin{bmatrix} \text{V} \\ +\text{back} \\ -\text{high} \\ +\text{low} \end{bmatrix} \text{ w-an/} \rightarrow ((18) \text{ は不適用})$
 $\rightarrow [\text{warawan}] <\text{笑わない}>$
- c. $\text{/yat } \begin{bmatrix} \text{V} \\ +\text{back} \\ -\text{high} \\ 0 \text{ low} \end{bmatrix} \text{ w-ta/} \rightarrow (18) \rightarrow \text{yat } \begin{bmatrix} \text{V} \\ +\text{back} \\ -\text{high} \\ -\text{low} \end{bmatrix} \text{ w-ta}$
 $\rightarrow (\text{OR}) \rightarrow [\text{jatota}] <\text{雇った}>$
- d. $\text{/yat } \begin{bmatrix} \text{V} \\ +\text{back} \\ -\text{high} \\ 0 \text{ low} \end{bmatrix} \text{ w-an/} \rightarrow ((18) \text{ は不適用}) \rightarrow (\text{OR})$
 $\rightarrow \text{yat } \begin{bmatrix} \text{V} \\ +\text{back} \\ -\text{high} \\ +\text{low} \end{bmatrix} \text{ w-an} \sim \text{yat } \begin{bmatrix} \text{V} \\ +\text{back} \\ -\text{high} \\ -\text{low} \end{bmatrix} \text{ w-an}$
 $\rightarrow [\text{jatawan}] \sim [\text{jatowan}] <\text{雇わない}>$

/kaw-/<買う>はAグループの動詞, /waraw-/<笑う>はBグループの動詞, /yataw-/<雇う>はCグループの動詞である。(19 a, c) では (18) が適用されており, (19 b, d) では (18) は適用されない。

ここで, (12) の a→u の交替について振り返ってみる。Bグループの動詞の語幹は, (17 a) のような表示になっているので, (12) は次のように書き換えることができる。

(20) a/u 交替規則

$$\begin{bmatrix} \text{V} \\ +\text{low} \end{bmatrix} \rightarrow \begin{bmatrix} +\text{high} \\ -\text{low} \end{bmatrix} / \text{ ar } ___ \text{ w-t}$$

この際, Aグループの動詞と区別するために, (20) の環境に ar という部分は必要である。ここで気になることは, (20) によって [high] の指定だけでな

く，[low] の指定も変えていることである。[low] の指定は，似たような環境で (18) によって変えられることから，[low] の指定の変更は (18) に任せ，[high] の指定のみを変更する規則として，(20) を次のように改訂してみる。

(21) o/u 交替規則

$$V \rightarrow [+high] / ar ___ w-t$$

この規則は，(18) よりも後に適用されなければならない。例えば，Bグループ動詞の /waraw-/ <笑う> のU系列形の完了形は，次のような派生をする。

$$\begin{aligned} (22) \quad /war \begin{bmatrix} V \\ +back \\ -high \\ +low \end{bmatrix} w-ta/ &\rightarrow (18) \rightarrow war \begin{bmatrix} V \\ +back \\ -high \\ -low \end{bmatrix} w-ta \rightarrow (21) \\ &\rightarrow war \begin{bmatrix} V \\ +back \\ +high \\ -low \end{bmatrix} w-ta/ \rightarrow (OR) \rightarrow [waruta] <笑った> \end{aligned}$$

ここで更に，(21) を一般化してみる。次のようなデータがあることに注意しよう。

(23) a. /asob-/ <遊ぶ>	ason	asoban	asoda
	*asan	*asaban	*asada
	asun	asuban	asuda
b. /nob-/ <延びる>	non	noban	*noda
			nonda
	*nan	*naban	*nada
			*nanda
	nun	nuban	*nuda
			nunda

c. /tanom-/<頼む>	tanon	tanoman	tanoda
	*tanan	*tanaman	*tanada
	&tanun	&tanuman	*tanuda

これらの動詞では、 $V_1 = /o/$ であり、U系列形の完了形が適格となっている。勿論、(23 b) は語幹基底形で $V_2 = \phi$ (ゼロ) である点で例外、(23 c) はU系列形の完了形が不適格で、終止形・否定形が適格であるという点で考慮の余地があるが、これらを保留して (21) を仮に次のように改訂してみる。

(24) o/u 交替規則 (改訂版)

$$V \rightarrow [+high] / a \overset{C}{[+cor]} \text{ ___ } \overset{C}{[+lab]} -t$$

勿論、このように改訂したとしても、(18) より後に適用されるという線条的順序 (linear ordering) は変わらない。従って、(24) によって、Bグループ動詞のU系列形の完了形だけでなく、(23 a) のようなものも記述できるのである。では、(23 b, c) のような例外があるにも拘らず (/yataw-/<雇う>も (24) が適用されて * [jatsuta] <雇った> が派生される点で例外である)、なぜ (24) のような一般化を仮定したのか。これは、まず C_1 を $[+lab]$ で、 C_2 を $[+cor]$ でまとめられるからである。また、 $V_1 = /o/$ である動詞で、適格なU系列形が表面に現れるのは、今までの調査では (23) の3例だけだからである。これらは、U系列形が (20) のような $a \rightarrow u$ の交替によるのではなく、 $o \rightarrow u$ の交替によるものである、ということを示す傍証になるかも知れない。しかし、現段階では (24) は暫定的なものであることを明記しておく。

2.4. Dグループ

次に、Dグループの動詞を見てみる。

(25) a. /orab-/<叫ぶ>	oran	oraban	&orada
---------------------	------	--------	--------

五島列島・下崎山町方言の動詞における後舌母音の交替（有元）

	oron	oroban	oroda
	*orun	*oruban	*oruda
/erab-/＜選ぶ＞ ⁹⁾	jeran	jeraban	jerada
	jeron	jeroban	jeroda
	*erun	*eruban	*eruda
b. /am-/＜編む＞	an	aman	ada
	on	oman	oda
	*un	*uman	*uda
/ogam-/＜拝む＞	ogan	ogaman	ogada
	ogon	&ogoman	ogoda
	*ogun	*oguman	*oguda
/tukam-/＜掴む＞	tsukan	tsukaman	tsukada
	tsukon	tsukoman	tsukoda
	*tsukun	*tsukuman	*tsukuda
/kogam-/＜屈む＞	kogan	kogaman	kogada
	kogon	kogoman	kogoda
	*kogun	*koguman	*koguda

(25) の例では、A系列形及びO系列形は、どの活用形でも適格であるが、U系列形では全て不適格である。これらは、一見Cグループと似た振る舞いをしているように見えるが、Cグループと異なる点は、A系列形の完了形が適格ということである。従って、DグループをCグループから区別するためには、(18) の環境を変えるのではなく、Dグループの語幹基底形を次のように設定する方が良い。

$$(26) \text{ Dグループ: } / \text{ X } \left[\begin{array}{c} \text{V} \\ +\text{back} \\ -\text{high} \\ 0 \text{ low} \end{array} \right] \left[\begin{array}{c} +\text{cons} \\ +\text{lab} \end{array} \right] - /$$

[+cons, +lab] は /b, m/ のことであるので, $C_1 = /b, m/$ のとき V_1 の位置にある母音の素性 [low] は基底で指定されていないということになる。これによって, 規則 (18) が適用されるのを免れる。

2.5. E グループ

次に, E グループの例を見てみよう。

(27) a. /narab-/ <並ぶ>	naran	naraban	& narada
	naron	naroban	naroda
	narun	naruban	naruda
b. /kagam-/ <屈む>	kagan	kagaman	kagada
	kagon	kagoman	kagoda
	kagun	kaguman	kaguda
/tatam-/ <畳む>	tatan	tataman	tatada
	taton	tatoman	tatoda
	tatsun	tatsuman	tatsuda

A 系列形・O 系列形が全ての活用形で適格であることは, D グループと同じである。違うのは, U 系列形が全て適格になっていることである。これは, V_1 の素性 [high], [low] の指定が基底で無指定であることを示している。そこで, 次のように語幹基底形を設定する。

$$(28) \text{ E グループ: } / X \begin{bmatrix} V \\ +\text{back} \\ 0 \text{ high} \\ 0 \text{ low} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} +\text{cons} \\ +\text{lab} \end{bmatrix} - /$$

ここで /narab-/ <並ぶ>, /tatam-/ <畳む> の完了形には, (24) が適用される可能性があることに気付くであろう。(24) については, それがどういう適用方法を取るのか (義務適用か随意適用か) 何も言っていなかった。しかし,

義務的に適用されるとすると、上記2例の完了形には、U系列形しか出て来なくなる。従って、(24)は随意規則としなければならない。以下には、/narab-/ <並ぶ>の派生例を挙げておこう。

(29) a. 終止形

$$\begin{array}{c} \text{/nar} \left[\begin{array}{c} \text{V} \\ +\text{back} \\ 0 \text{ high} \\ 0 \text{ low} \end{array} \right] \text{b-2/} \rightarrow (\text{OR}) \rightarrow [\text{naran}] \sim [\text{naron}] \\ \sim [\text{narun}] <\text{並ぶ}> \end{array}$$

b. 否定形

$$\begin{array}{c} \text{/nar} \left[\begin{array}{c} \text{V} \\ +\text{back} \\ 0 \text{ high} \\ 0 \text{ low} \end{array} \right] \text{b-an/} \rightarrow (\text{OR}) \rightarrow [\text{naraban}] \sim [\text{naroban}] \\ \sim [\text{naruban}] <\text{並ばない}> \end{array}$$

c. 完了形

$$\begin{array}{c} \text{/nar} \left[\begin{array}{c} \text{V} \\ +\text{back} \\ 0 \text{ high} \\ 0 \text{ low} \end{array} \right] \text{b-ta/} \rightarrow (\text{OR}) \rightarrow [\text{narada}] \sim [\text{naroda}] \\ \sim [\text{naruda}] <\text{並んだ}> \\ \text{/nar} \left[\begin{array}{c} \text{V} \\ +\text{back} \\ 0 \text{ high} \\ 0 \text{ low} \end{array} \right] \text{b-ta/} \rightarrow (24) \rightarrow \text{nar} \left[\begin{array}{c} \text{V} \\ +\text{back} \\ +\text{high} \\ 0 \text{ low} \end{array} \right] \text{b-ta/} \\ \rightarrow (\text{OR}) \rightarrow [\text{naruda}] <\text{並んだ}> \end{array}$$

完了形 (29c) では、(24)が適用される場合とされない場合を挙げた。(24)が適用される場合は、(24)によって [+high] が付与された後、普遍的 (universal) な規則によって [low] にはマイナスの値が付与される¹⁰⁾。従って、この場合にはU系列形しか出ない。これは、重複していて一見無駄なように見えるが、(18)、(24)の適用環境を複雑に変えるよりは良い。また、今までう

まく説明できていたBグループに対して悪さをするものもない¹¹⁾。

2.6. Fグループ

次に、Fグループの動詞を見る。

(30) /syagam-/ <しゃがむ>	ʃagan	ʃagaman	ʃagada
	*ʃagon	*ʃagoman	ʃagoda
	*ʃagun	*ʃaguman	*ʃaguda
/tumam-/ <抓む>	tsuman	tsumaman	tsumada
	*tsumon	*tsumoman	tsumoda
	*tsumun	*tsumuman	*tsumuda

このグループは、Aグループと似ているが、異なる所はA系列形の完了形が適格であるという点である。しかし、そうであるからと言って、(18)を

$$(31) \begin{bmatrix} V \\ +back \\ -high \end{bmatrix} \rightarrow [-low] / \text{---} \overset{C}{[+lab]} - t$$

と改訂し、(31)は随意規則であるとしては、今までうまくいっていたAグループの完了形を説明できないことになる。語幹基底形のV₁の基底表示はAグループと同じであるから、次のような規則を設定することにする。

(32) a/o 交替規則 (随意規則)

$$\begin{bmatrix} V \\ +back \\ -high \end{bmatrix} \rightarrow [-low] / \text{---} \begin{bmatrix} +cons \\ +lab \end{bmatrix} - t$$

この規則は、その環境から言ってDグループの完了形にも適用される。派生例は、次の通りである。

(33) a. Dグループ

/or $\begin{bmatrix} V \\ +back \\ -high \\ 0\ low \end{bmatrix}$ b-ta/ → (OR) → [orada] ~ [oroda] <叫んだ>

/or $\begin{bmatrix} V \\ +back \\ -high \\ 0\ low \end{bmatrix}$ b-ta/ → (32) → or $\begin{bmatrix} V \\ +back \\ -high \\ -low \end{bmatrix}$ b-ta

→ (OR) → [oroda] <叫んだ>

b. Fグループ

/tum $\begin{bmatrix} V \\ +back \\ -high \\ +low \end{bmatrix}$ m-ta/ → (OR) → [tsumada] <つまんだ>

/tum $\begin{bmatrix} V \\ +back \\ -high \\ +low \end{bmatrix}$ m-ta/ → (32) → tum $\begin{bmatrix} V \\ +back \\ -high \\ -low \end{bmatrix}$ m-ta

→ (OR) → [tsumoda] <つまんだ>

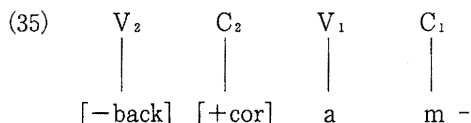
ここでは、(32) が随意規則であることから、(32) が適用されない場合とされる場合の派生例を挙げている。いずれも適格な形を派生する。

2.7. Gグループ

次に、Gグループの動詞を見てみる。

(34) /neram-/ <睨む>	neran	neraman	nerada
	neron	*neroman	neroda
	*nerun	*neruman	*neruda
/itam-/ <痛む>	itan	itaman	itada
	iton	*itoman	itoda
	*itsun	*itsuman	*itsuda

このグループは例外的である。今までのグループでは、A系列形・O系列形・U系列形のどの系列形であっても、終止形と否定形の適格性は同じであった。即ち、終止形が適格であれば必ず否定形も適格であった。その意味で、終止形と否定形は同じまとまりとして扱い、完了形だけをこれらと別物として扱うことが妥当であって、事実そうしてきた。しかし、このGグループのO系列形では、否定形だけが不適格である。今までの枠組みでは、この現象を説明することはできないが、気になることは、語幹の基底形が(34)の二例では似ていることである。図式化すると、両方とも次のような環境を持っている。



これは、偶然とは思えない。なぜなら、このような環境を持つm語幹動詞は、数の点で非常に限られているからである。(35)の C_1 を[+lab]としても、そのような環境を持つ動詞の数は限られていて、非常に少ない。何らかの規則性はあるそうだが、現時点では保留する。

2.8. Hグループ

次に、Hグループの動詞を見てみよう。

(36) a. /kizam-/ <刻む>	kidzan	kidzaman	kidzada
	*kidzon	*kidzoman	*/+kidzoda
	kidzun	kidzuman	kidzuda
b. /hasam-/ <挟む>	hasan	hasaman	hasada
	*/+hason	*/+hasoman	hasoda
	hasun	hasuman	hasuda

これら二例は、O系列形で適格性にゆれが見られるものである（適格性のゆれ

は、記号*/+で表す)。(36 a) では完了形で、(36 b) では終止形と否定形でゆれが見られる。いずれにしても、A系列形とU系列形はどの活用形でも適格であるので、今までのグループとは別の扱いをする必要があると思われる。しかも、(36) ではm語幹動詞二例しか挙げていないにも拘らず、(36 a) と (36 b) は語幹基底形がどちらも $C_2 = [+cor, +strid]$ (歯茎摩擦音) である点で共通している。更に、 $C_2 = [+cor, +strid]$, $V_1 = /a/$, $C_1 = [+lab]$ である動詞は、私が調べた限りでは、この二例以外にはない。以上のことから、何らかの規則性は認められるものの、データそのものの適格性がゆれていることから、保留せざるを得ない。今後の調査に期するものである。

2.9. 後舌母音交替を起こさない例

ここでは、後舌母音の交替を起こさない例、即ちO系列形・U系列形のどの活用形も不適格である例を挙げる。

まずw語幹動詞についてであるが、これは例外なく $V_1 = /a/$ であれば母音交替が起こる。b語幹動詞についても例外がない。但し、b語幹動詞は三例しかなく、しかもそれらの動詞は全て語幹基底形の環境が似ているため、余り確かなことは言えないかも知れない。次に、m語幹動詞であるが、母音交替を起こさない例は、次の動詞である。

(37) /netam-/<妬む>	netan	netaman	netada
	*neton	*netoman	*netoda
	*netsun	*netsuman	*netsuda
/kibam-/<黄ばむ>	kiban	kibaman	kibada
	*kibon	*kiboman	*kiboda
	*kibun	*kibuman	*kibuda
/nayam-/<悩む>	najan	najaman	najada
	*najon	*najoman	*najoda

	*najuN	*najuman	*najuda
/uram-/＜恨む＞	uran	uraman	urada
	*uron	*uroman	*uroda
	*urun	*uruman	*uruda

以上, $V_1 = /a/$ である動詞の母音交替現象を見てきたが, ここで $V_1 = /o/$ 及び $V_1 = /u/$ である動詞を, それぞれ (38), (39) に挙げておく。

(38) $V_1 = /o/$

a. /yow-/＜酔う＞	jo?	jowan	jota
	*ja?	*jawan	*jata
	*ju?	*juwan	*juta
/mayow-/＜迷う＞	majo?	majowan	majota
	*maja?	*majawan	*majata
	*maju?	*majuwan	*majuta
/sokow-/＜繕う＞	soko?	sokowan	sokota
	*soka?	*sokawan	*sokata
	*soku?	*sokuwan	*sokuta
b. /tob-/＜飛ぶ＞	ton	toban	*toda
			tonda
	*tan	*taban	*tada
			*tanda
	*tsun	*tsuban	*tsuda
			*tsunda
/yob-/＜呼ぶ＞	jon	joban	joda
	*jan	*jaban	*jada
	*jun	*juban	*juda
/korob-/＜転ぶ＞	koron	koroban	koroda

五島列島・下崎山町方言の動詞における後舌母音の交替（有元）

	*koran	*koraban	*korada
	*korun	*koruban	*koruda
/hakob-/＜運ぶ＞	hakon	hakoban	hakoda
	*hakan	*hakaban	*hakada
	*hakun	*hakuban	*hakuda
/huttob-/＜吹っ飛ぶ＞	Φutton	Φuttoban	Φuttoda
	*Φuttan	*Φuttaban	*Φuttada
	*Φuttsun	*Φuttsuban	*Φuttsuda
/nekorob-/＜寝転ぶ＞	nekoron	nekoroban	nekoroda
	*nekoran	*nekoraban	*nekorada
	*nekorun	*nekoruban	*nekoruda
c. /yom-/＜読む＞	jon	joman	joda
	*jan	*jaman	*jada
	*jun	*juman	*juda
/nekom-/＜寝込む＞	nekon	nekoman	nekoda
	*nekan	*nekaman	*nekada
	*nekun	*nekuman	*nekuda
/nom-/＜飲む＞	non	noman	noda
	*nan	*naman	*nada
	*nun	*numan	*nuda
/kakom-/＜囲む＞	kakon	kakoman	kakoda
	*kakan	*kakaman	*kakada
	*kakun	*kakuman	*kakuda
/hekom-/＜凹む＞	hekon	hekoman	hekoda
	*hekan	*hekaman	*hekada
	*hekun	*hekuman	*hekuda
/hikkom-/＜凹む＞	çikkon	çikkoman	çikkoda

	*çikkan	*çikkaman	*çikkada
	*çikkun	*çikkuman	*çikkuda
/nozom-/ <望む>	nodzon	nodzoman	nodzoda
	*nodzan	*nodzaman	*nodzada
	*nodzun	*nodzuman	*nodzuda
/sibom-/ <萎む>	sibon	siboman	siboda
	*siban	*sibaman	*sibada
	*sibun	*sibuman	*sibuda
/subom-/ <萎む>	subon	suboman	suboda
	*suban	*subaman	*subada
	*subun	*subuman	*subuda
/mom-/ <揉む>	mon	moman	moda
	*man	*maman	*mada
	*mun	*muman	*muda

(39) V₁ = /u/

a. /suw-/ <吸う>	su?	suwan	*suta ¹²⁾
	su:		su:ta
	*so?	*sowan	*sota
	*so:		*so:ta
/kuw-/ <食う>	*ku?	kuwan	kuta
	ku:		ku:ta
	*ko?	*/+kowan	*kota
	*ko:		*ko:ta
/nuw-/ <縫う>	*nu?	nuwan	*/+nuta
	nu:		nu:ta
	*no?	*nowan	*nota

五島列島・下崎山町方言の動詞における後舌母音の交替（有元）

	*no:		*no:ta
/nuguw-/＜拭う＞	nugu?	nuguwan	nuguta
	nugu:		nugu:ta
	*nugo?	*nugowan	*nugota
	*nugo:		*nugo:ta
/sukuw-/＜掬う＞	suku?	sukuwan	sukuta
	suku:		suku:ta
	*suko?	*sukowan	*sukota
	*suko:		*suko:ta
/yuw-/＜結う＞	ju?	juwan	juta
	ju:		ju:ta
	*jo?	*jowan	*jota
	*jo:		*jo:ta
/kuruw-/＜狂う＞	kuru?	kuruwan	kuruta
	kuru:		kuru:ta
	*kuro?	*kurowan	*kurota
	*kuro:		*kuro:ta
b. /musub-/＜結ぶ＞	musun	musuban	musuda
	*muson	*musoban	*musoda
c. /kum-/＜汲む＞	kun	kuman	*kuda
			kunda
	*kon	*koman	*koda
			*konda
/sidum-/＜沈む＞	sidzun	sidzuman	sidzuda
	*sidzon	*sidzoman	*sidzoda
/yasum-/＜休む＞	jasun	jasuman	jasuda
	*jason	*jasoman	*jasoda

/hum-/＜踏む＞	Φun	Φuman	* Φuda Φunda
	*hon	*homan	*hoda *honda
/ayum-/＜歩く＞	ajun	ajuman	ajuda
	*ajon	*ajoman	*ajoda
/um-/＜膿む＞	un	uman	*uda unda
	*on	*oman	*oda *onda
/nikum-/＜憎む＞	nikun	nikuman	nikuda
	*nikon	*nikoman	*nikoda
/susum-/＜進む＞	susun	susuman	susuda
	*suson	*susoman	*susoda
/tum-/＜積む＞	tsun	tsuman	*/+tsuda tsunda
	*ton	*toman	*toda *tonda
/tutum-/＜包む＞	tsutsun	tsutsuman	tsutsuda
	*tsuton	*tsutoman	*tsutoda
/yurum-/＜緩む＞	jurun	juruman	juruda
	*juron	*juroman	*juroda
/sudum-/＜涼む＞	sudzun	sudzuman	sudzuda
	*sudzon	*sudzoman	*sudzoda

以上の例から分かるように、(38) では $o \rightarrow a$ の交替も $o \rightarrow u$ の交替も起こっていない¹³⁾。また、(39) では $u \rightarrow o$ の交替も起こっていない ($u \rightarrow a$ の交替に

については未調査)。適格性のゆれは、 $*/+[kowan]$ ＜買わない＞、 $*/+[nuta]$ ＜縫った＞、 $*/+[tsuda]$ ＜積んだ＞に見られる。

3. おわりに

以上、動詞の活用形における母音の交替は、意味の弁別に無関係であって、これを交替する母音の基底表示の素性が指定されていないことで説明してきた。即ち、 V_1 の位置にある母音を不完全指定（underspecify）することによって、後舌母音の交替規則をより簡潔なものにすることを目指してきた。ここで、再度語幹基底形と母音交替規則を挙げておく。

- (40) a. $/X \left[\begin{array}{c} V \\ +back \\ -high \\ +low \end{array} \right] w - / \dots A \cdot B \text{グループ}$
- b. $/X \left[\begin{array}{c} V \\ +back \\ -high \\ 0 \text{ low} \end{array} \right] w - / \dots C \text{グループ}$
- c. $/X \left[\begin{array}{c} V \\ +back \\ -high \\ 0 \text{ low} \end{array} \right] \left[\begin{array}{c} +cons \\ +lab \end{array} \right] - / \dots D \text{グループ}$
- d. $/X \left[\begin{array}{c} V \\ +back \\ 0 \text{ high} \\ 0 \text{ low} \end{array} \right] \left[\begin{array}{c} +cons \\ +lab \end{array} \right] - / \dots E \text{グループ}$
- e. $/X \left[\begin{array}{c} V \\ +back \\ -high \\ +low \end{array} \right] m - / \dots F \text{グループ}$

以上、各グループの語幹基底形を挙げたが、良く見ると、これらの内の幾つかは一つにまとめられるように思える。例えば、(40 b) と (40 c) は一つにまとめて、

$$(41) / X \begin{bmatrix} V \\ +back \\ -high \\ 0 \text{ low} \end{bmatrix} \left[\begin{bmatrix} C \\ +lab \end{bmatrix} \right] - / \dots C \cdot D \text{グループ}$$

とすることができるように思える。しかし、このようにまとめることには意味がない。そもそも (40) は、単に分類上 (taxonomic) のものである。ある動詞が (3) のどのグループに属するかとか、(40) のどの分類に属するかとかの問題ではなく、ある動詞がどのような語幹基底形を持っているかが問題である。例えば、/orab-/<叫ぶ>は、

$$(42) / \text{or} \begin{bmatrix} V \\ +back \\ -high \\ 0 \text{ low} \end{bmatrix} b - / <\text{叫ぶ}>$$

という語幹を基底で持っているというように、動詞ごとに語幹が辞書部門で指定されているだけのことである。

一方、後舌母音交替を起こさない動詞については、次のような語幹基底形を持っていると言える。即ち、 V_1 のどの素性も完全に指定されている。

$$(43) a. / X \begin{bmatrix} V \\ +back \\ -high \\ +low \end{bmatrix} m - / \dots (37)$$

$$b. / X \begin{bmatrix} V \\ +back \\ -high \\ -low \end{bmatrix} \left[\begin{bmatrix} C \\ +lab \end{bmatrix} \right] - / \dots (38)$$

$$c. / X \begin{bmatrix} V \\ +back \\ +high \\ -low \end{bmatrix} \left[\begin{bmatrix} C \\ +lab \end{bmatrix} \right] - / \dots (39)$$

(40e) と (43a) は同じであるが、これも動詞ごとに V_1 の指定が決められており、m語幹動詞の中には、Fグループのように振る舞う動詞もあれば、(37)

のように振る舞う動詞もある，ということである¹⁴⁾。

次に，後舌母音の交替規則を挙げておく。

(44) a. a/o 交替規則（義務規則）= (18)

$$\left[\begin{array}{c} \text{V} \\ +\text{back} \\ -\text{high} \end{array} \right] \rightarrow [-\text{low}] / \text{ ______ } \text{w} - \text{t}$$

b. o/u 交替規則（随意規則）= (24)

$$\text{V} \rightarrow [+high] / \text{ \overset{C}{a} } [+cor] \text{ \overset{C}{______} } [+lab] - \text{t}$$

c. a/o 交替規則（随意規則）= (32)

$$\left[\begin{array}{c} \text{V} \\ +\text{back} \\ -\text{high} \end{array} \right] \rightarrow [-\text{low}] / \text{ ______ } \left[\begin{array}{c} +\text{cons} \\ +\text{lab} \end{array} \right] - \text{t}$$

(44 b) は (44 a) の後に順序付けられている。派生例はそれぞれの節で挙げたので，ここでは省略する。

動詞というのは，数の上で非常に限られた範疇である。それにも拘らず，例外が出てくる。本稿では，そういった例外を保留して，議論を進めてきた。また，様々な提案も提出してきた。その中には，本稿で述べた記述とは全く異なる phonotactic な制約に関わるのではないかと考えられるようなものもある。それゆえ，全体の枠組みが明瞭でない部分も多くある。以上，全て，今後の調査及び研究によって，記述の精度を高めるまでである。

註

- 1) 本稿は，有元（1991）の「a/o 交替」の部分の改訂版である。有元（1991）では，この母音交替現象を「母音交替A」（有元（1991：80））の一つとして捉えていたが，後の調査によって，「a～o 交替」ではなく，「a～o～u 交替」即ち「後舌母音交替」として捉え直さねばならないことが分かった。従って，本稿では，有元（1991）の ad hoc な記述を止め，新たなデータと共に，新たな枠組みを使って，より体系的な記述を目指す。本稿のデータは，主に1990年7月28～30日・

1991年8月6～8日の調査によって得られたものである。インフォーマントは、白浜キヨ子氏（昭和4（1929）年生，女性）にお願いした。記して，感謝致します。

- 2) C=[-syllabic], V=[+syllabic] とする。
- 3) 音声形の左側に付けた各種の記号には，次のような意味がある。まず，記号*は，その音声形が不適格であることを表す。記号?はその音声形が少々奇妙であるとインフォーマントが感じている形，記号&は聞いたことがある形であることをそれぞれ表す。また，音声表記は簡略表記を採っている。基底形を記号 // で，音声形を記号 [] で括って示すが，文脈上明かな箇所では省略する。記号 <> は，未調査項目を表す。境界記号 - は，形態素境界（morpheme boundary）を表す。活用形の種類の名称は便宜上のものである。正確に言えば，「終止形」「否定形」「完了形」は，それぞれ「未完了肯定連体形」「未完了否定連体形」「完了肯定連体形」である。
- 4) [lab]=labial, [cor]=coronal, [cons]=consonantal, [strid]=strident とする。素性（distinctive feature）に関する細かい議論は一切省略する。また，音韻規則は，煩雑を避けるため，必要な部分のみ素性を使って表す。
- 5) 本稿に関与しない音韻規則については，全て省略し，それらをまとめて OR（other rules）とする。この中には，例えば，
(i) C → ϕ / ___ - t
のような規則などが含まれる。
- 6) 「有声性同化」とは，語幹末子音が有声であれば，完了の接辞 /ta/ の /t/ が有声化する，という規則である。
- 7) 歴史的に言えば，a → o の交替は完了形のみに適用されていたものが，類推（analogy）によって，終止形や否定形などの完了形以外の活用形にも波及してしまった。そこで，共時的には /Xaw-/ ～ /Xow-/ という二つの語幹を持つようになったと考えられる（X は variable を表す。従って， ϕ （ゼロ）でも良い）。
- 8) ここで気付くことは，(4b) を無視していることである。本来なら（17a）に組み込まねばならないのであるが，(4b) 一例しかないことが少々気になる。調査が不十分であるのか，それとも（4b）のような例が本当に存在するのか（自分の調査自体を疑っている訳ではない），現時点では不明だが，もしそうであるのなら，（17a）の C₁ の位置は /w/ だけでなく /m/ も含めないといけなくなる。そうすると，母音交替規則（18）の環境も変えなければならなくなり，枠組みの大きな改訂も必要になってくる。勿論，改訂は厭わないが，現時点では（4b）の例は保留しておくことにする。無指定の素性の値は 0（ゼロ）で表す。
- 9) [e] と [je] は対立しない。

- 10) これは、次のような規則である。

[+high] → [-low]

これは、Chomsky & Halle (1968) では redundancy rule とか linking rule と、Halle & Vergnaud (1987: 148-9) では persistent rule とか i-rule (internal rule) と呼ばれているものである。詳細は省略する。

- 11) このEグループの動詞は、(27) のように三例しかないが、語幹基底形について気になることがある。(27) の動詞の語幹は全て、次のような二点で共通している。

(i) $V_1=V_2=/a/$

(ii) C_2 と C_3 の素性 [cor], [back], [grave] の指定が同じである。

(i) については、本節では、 $V_1=[+back, 0\ high, 0\ low]$ と基底では指定してあるので、厳密に言えば $V_1 \neq V_2$ である。しかし、表面的には (i) が言える。(ii) に関しては、素性 [cor], [back], [grave] のうち、どの素性が関与的 (relevant) であるのか、明らかにはなっていない。また、(27) では b, m 語幹動詞の例しかないが、(i) の点では (11) のBグループとも共通していることが興味深い。以上のことは、とても偶然の一致とは思えない。従って、何らかの規則性があるように思えるのだが、このことについては別の機会に譲ることにする。

- 12) ちなみに、U系列形の完了形 (*[suta] <吸った> などの短母音形) が不適格になるのは、次のような音節数条件のためである。

音節数条件 (有元 (1991: 左189))

(完了形において) 語幹末子音が両唇音 (bilabial) で、その直前の母音が /u/ である動詞において、その語幹が一音節である場合、短母音形は不適格となる。

但し、[kuta] <食った>, [juta] <結った> は語幹が一音節であるにも拘らず適格であり、また */+[nuta] <縫った>, */+[tsuda] <積んだ> では適格性の判断がゆれている。

- 13) $V_1=/o/$ の動詞で、U系列形が適格になる例は、既に (23) で挙げた。
14) (40) を見ると、従来 /a/ としていたものを、本稿では次の3種類に分けてい

(i) a. $\begin{bmatrix} V \\ +back \\ -high \\ +low \end{bmatrix}$ b. $\begin{bmatrix} V \\ +back \\ -high \\ 0low \end{bmatrix}$ c. $\begin{bmatrix} V \\ +back \\ 0\ high \\ 0low \end{bmatrix}$

また、(43 b, c) から分かるように、後舌母音には、(i) の他に /o/, /u/ も存在する。これらの基底表示は次のようになる。

$$(ii) \quad a. \quad \begin{bmatrix} V \\ +back \\ -high \\ -low \end{bmatrix} = /o/ \qquad b. \quad \begin{bmatrix} V \\ +back \\ +high \\ -low \end{bmatrix} = /u/$$

(i), (ii) が全て互いに弁別的 (distinctive) であるならば, 当方言の母音は, 後舌母音だけで5つもあることになってしまう。(i a) と (ii a) と (ii b) が互いに弁別的であることはまず間違いないだろうが, 問題は, (i b) と (i a), (ii a), そして (i c) と (i a), (ii a), (ii b) がそれぞれ弁別的であると言って良いのかどうかである。この問題には理論上決定的なことが含まれているのであるが, 不十分な議論を展開するよりは, ここで止めておく方が良いようである。理論上の体系的な枠組みについては, 別稿に譲る。

参考文献

- 有元光彦 (1990) 「五島列島・下崎山町方言の動詞の「テ形」における音韻現象について」『国語学』第163集 国語学会編 左 pp.27-38
- (1991) 「五島列島・下崎山町方言における動詞語幹内母音の交替 — a/o 交替・o/e 交替—」『九大言語学研究室報告』第12号 九州大学文学部言語学研究室編 pp.79-91
- Chomsky, N. & M. Halle (1968) *The Sound Pattern of English*, Harper & Row, Publishers.
- Halle, M & J.-R. Vergnaud (1987) *An Essay on Stress*, The MIT Press.